

## 住み継ぐための仕組みの研究

## - 木造と耐力壁の関係性について -

日大生産工(院) ○小山 茜 渡辺研究室 渡辺 康

## 1 まえがき

近年、日本は空家の増加の問題からもスクラップアンドビルドを止め、リノベーション、コンバージョンが見直されている。それに伴い、住宅のリノベーションのコストや家族の増減による住宅のプランニングが課題になっている。本調査は古い住宅のリノベーションに対する意識調査と、木造と耐震性の向上の方法について提案する物である。

## 2 調査方法

調査は2段階に分けて行う。

## 2-1 段階1

調査の対象は、核家族で生活していて次に家を住み継ぐ世代と、3世代以上で生活をしている家庭で次に家を住み継ぐ世代に実施し、意識の違いを調査する。

調査内容は、家を住み継ぐ意識についての以下の3項目について行う。

- ①兄弟の有無
- ②両親の意思
- ③本人の意思

## 2-2 段階2

3世代以上で生活している家庭には、2-1の調査とは別にヒヤリング調査を実施する。家族関係や生活面、金銭面まで深く調査を行うため、対象を関東近郊（埼玉、群馬、栃木）の5家族にしばって実施する。

調査対象は以下の5つの家庭である。

- ・I家（祖父母・両親・子供2人・叔父叔母 従兄弟2人）
- ・W家（祖父母・両親・兄弟3人・兄夫婦・子供2人）
- ・T家（そう祖母・祖父母・両親・兄弟3人・従兄弟の両親・従兄弟4人）
- ・G家（祖父母・両親・兄弟2人・兄夫婦・兄夫

婦の子供2人）

- ・K家（祖父母・両親・娘夫婦・子供3人）

調査の内容は

- ・同居の理由
- ・同居に対する意識（問題点など）とする。

## 3 結果

## 3-1 意識調査1

兄弟の有無によって意識が異なっているため、調査対象の兄弟の有無とその人数別に結果をまとめる。

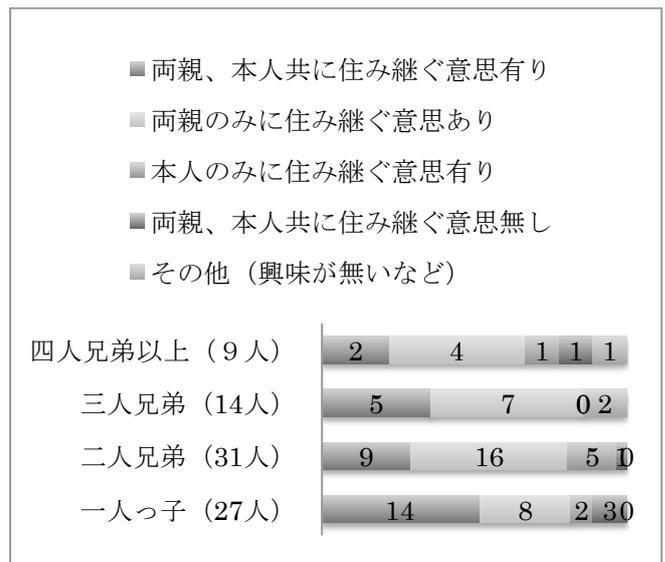


図1：兄弟の人数別、両親と本人の住み継ぎの意識の差

住み継ぐ世代に兄弟が存在し、その人数が多いほど住み継ぐ意思が薄れていく事がわかる。両親、本人への調査により、住み継がない理由として以下の問題が上げられていた。

- ・ 子供（兄弟）が複数いるため、誰かが住むと考えている。
- ・ 古い家を引き渡すのは後にメンテナンスなどのお金がかかるため迷惑である。
- ・ 税金、相続の問題。
- ・ 成人しても兄弟と同じ部屋に住んでいるため。
- ・ その他（結婚相手などの同居への不理解など）となった。

### 3-2 意識調査2

3世代以上で生活をしている5家族を対象に共に住むと言う事に対する意識について以下の項目でヒヤリングを行う。

- ・ 金銭面
- ・ 介護・子育て
- ・ 仕事の都合
- ・ 未婚の家族について
- ・ その他（愛着や人間関係）

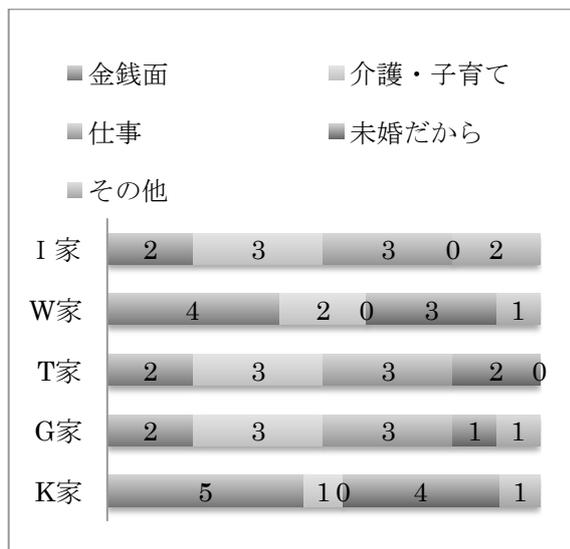


図2：共に住んでいる理由とその割合

#### まとめ① 金銭面について

同居により様々な生活費を支え合うことができる。先祖から受け継いだ土地に住まう事により家賃がかからない分、古い住居にメンテナンスを頻繁に行う必要がある為、メンテナンスの方法やそのコスト面で問題が起こりやすい。

#### まとめ② 介護や子育てについて

介護や子育てに置いて「人手」が重要である。同居すると一族の問題を把握しやすくなり、問題も多いが解決しやすくなる。また、介護において、介護をする側の負担が軽くなるため、体調面で問題が無い限り最後まで自宅で介護ができるというメリットが大きい。

#### まとめ③ 仕事について

I家、T家、G家は農家などの家業を一族で生業としている。そのため、住居に事務所や休憩場、倉庫などが併設されている事が多い。住み始めた時分は部屋があったため同居をしたが、その後に家族が増え、個人の部屋が不足する傾向がある。

#### まとめ④ 結婚について

W家とK家は住み継ぐ世代は18歳～32歳であり、結婚を機に実家との別居を考えている。結婚をして自分の家庭と家を持つ事を目標とする傾向があるため、それまでの期間を実家で生活している。

#### まとめ⑤ その他の項目について

家やその土地への愛着から、住み慣れた土地にいる場合である。友人や家族がそばにいるため、安心して生活できる。

### 3-3 リノベーションに求めるもの

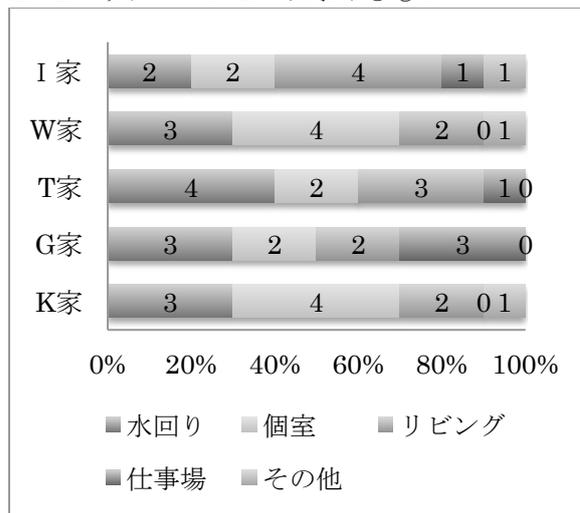


図3：住居の中のリノベーション優先順位とその割合

幼い子供がいるI家・G家ではリビングやダイニングなどの家族が集う空間のリノベーションを重視している。また、住み継ぐ世代の年齢が18歳以上のW家・K家ではプライベート空間を重視し、個室のリノベーションが優先される傾向がある。

よって、家族の年齢によって重視される空間が移行行く事がわかる。

### 3-4 空間別のリノベーションの目的

#### (1) 水回り

風呂場、洗面所、トイレ、キッチンなどの水回りがどの家庭でも優先的にリノベーションしたいと考える空間である。家族の人数が増えれば増

えるほど、数や広さが確保できないと不便であり。建ててから年数を重ねると、カビや腐食、水漏れなどの問題が深刻になるようだ。

#### (2) リビング・ダイニング

建てた当初よりも家族が増えたため、お盆や正月に家族全員が集える場所が必要になる。しかし、日常では家族の食事の時間がずれることが多い事を考えると大空間が毎日必ずしも必要な訳ではないことがわかる。

#### (3) 個室

家族の人数によって子供の個室が確保されていない事が多い。子供が幼い時は兄弟が同じ部屋で生活する事ができるが、思春期になるとカーテンなどで無理に間仕切するため、プライベートな空間が確保されているとは言いがたく、それが理由で実家を離れ、子供部屋は物置になる傾向がある。

#### (4) 仕事場

家業を大家族で運営している為、住居に事務所などが併設されているが、来客などを居間に通す度に子供を外に遊びにいかせたり、要介護の家族を移動させたりしなければならない。また、家族の空間と仕事の空間が繋がっているため、仕事と生活の空間分離ができずにストレスを感じる事がある。また、空間分離ができないと家事をしている女性はその姿を外部の人に見られてしまう為、よく思われていないようである。

#### (5) その他 (収納・駐車場など)

家族が増えれば収納や駐車スペースの増設が必要になってくる。農家であるI家、T家、G家は土地があるため家族の駐車スペースに困る事がなく、増設が可能である。しかし、増設した建物が家屋からは離れる為、使いにくく汚れなども防ぎにくい。

### 4 リノベーションの問題点

リノベーションをするにあたっての問題点を調査すると以下の様になる。

- ・ リノベーションが新築を建てるのと同じくらいコストがかかる。
- ・ 要介護、体が不自由な家族がいるとリノベーションのために引っ越しをするのが難しい。
- ・ 仕事場と併設している住居があるため、長期間の休みを取る事が難しい。

金銭面はもちろん、工事の間の生活の変化にも配慮しなければならない事がわかる。

### 4 調査のまとめ

核家族で戸建て住宅に住んでいる子世代は、自分で戸建て住宅を建てる事を目標にしている事が多いため、住み継ぐ事意識はあまりない傾向にある。住み継ぐ世代に兄弟がいる家庭では、相続の問題やプライベート空間の不足が住み継ぐ事を躊躇させている。

核家族で子供が独立をすると残された夫婦は将来、老老介護になる確率が高い。それを防ぐ為に独立した子供達が戻って来たり、通ったりして生活をしている。そのため介護をする側の意思の疎通が難しく、介護や相続の問題で兄弟が不仲になる事も多い。

一方、三世代以上一族や血縁で同居している家庭は、金銭面や生活面で支え合っている。介護の問題では人手が十分に確保できると同時に介護の問題を一族間で共有・解決しやすい。しかし、個人のプライベートを確保する事が難しい。

高齢化社会である現代では集まって住む事は介護をする事に繋がっている。そのため、ストレスを軽減する仕組みや動線などを建築的に解決し、大勢で介護をする仕組みが必要であり、将来同居しようという意識が高い事がわかった。

### 5 設計提案

#### 5-1 設計の背景

今まで住んだ住居の記憶を残しつつ、多世代で住むことのできるリノベーションの方法を提案する。多世代で住む事ができるという事は、空家にする事が無く住み継ぐ事につながる。

設計の手法として、既存の構造を残し、新しい構造を入れる。新たに作る構造と構造の間に可動式の仕切りを挿入し状況により変化し部屋の増減を可能にする方法を提案する。

#### 5-2 例 A家 (築41年の民家)

日本の埼玉県のとある住宅A家をモデルとする。この住居には祖父母、両親、子供3人の3世代が住んでいる。子供部屋は2階とする (図4)

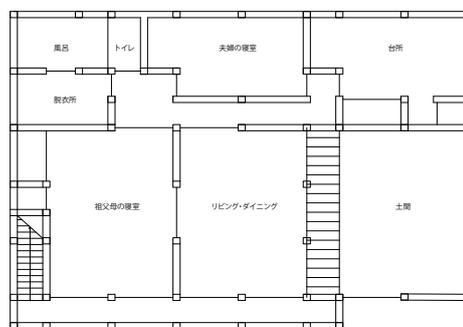


図4 A家 リノベーション前の平面図

### 5-3 提案

#### 提案 1

もとの柱や基礎を組み直すと、家の記憶を残しにくくなり、同時にコストがかかるため基礎を含む古い構造体は残す。(図5)

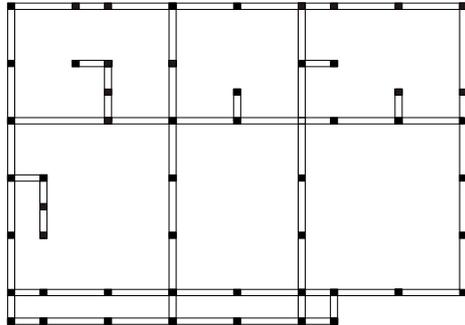


図5 A家 平面図から柱のみを残す

#### 提案 2

それらとは別に耐力壁を作り、その新たな構造体の中に可動式の間仕切りを作る事により、空間を自在にしきる事を可能にする。必要に応じて開閉できるので家族の人数の変化や用途の変化にも対応でき、快適に住み継ぐ事を可能にする。(図6)

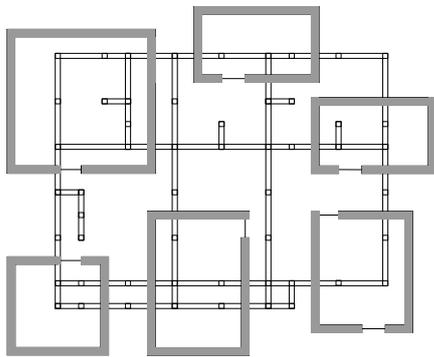


図6 A家 新しい構造を挿入する

また住宅を一遍に解体せず、家の中で荷物を移動しながらリノベーションできるので、要介護や体の不自由な家族がいた場合、仕事場が併設されている住宅でもリノベーションがしやすくなる。

新たに挿入する耐力壁が、もとあった構造への補強になる。木造の構造が朽ちて、もう一度リノベーションを重ねる事ができる様になれば、一つの住宅は何世代にも渡って住み継ぐ事ができる。(図7)

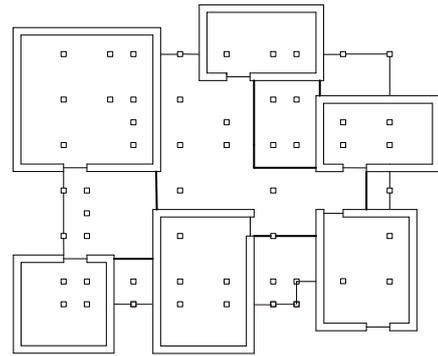


図7 A家 可動式間仕切りを挿入する

#### 「参考文献」

- 1) 今和次郎 「日本の民家」 岩波書店 (1989年) p.156~171
- 2) 神家昭雄 大角雄二 檜村徹 萩原嘉朗 佐藤隆 矢吹昭義「小民家再生術」住まいの図書館出版局 (1995年) p.142~159
- 3) 降幡廣信 「民家再生の設計手法」 彰国社 (1997年) p.84~107